



2015 年 10 月 19 日

2015 年ノーベル経済学賞受賞ディートン教授の途上国援助批判**公益財団法人 国際通貨研究所
開発経済調査部 主任研究員 福田 幸正**

10 月 12 日、2015 年のノーベル経済学賞は、米プリンストン大学のアンガス・ディートン教授に決まった。スウェーデン王立科学アカデミー発表の授賞理由によると「福祉増進と貧困削減を図る経済政策を立案する際、まず個人の消費行動を理解しなければならず、アンガス・ディートンはその分野の研究を深めた第一人者である。個人レベルの消費行動と総消費の関係性を明らかにすることによって、ミクロ経済学、マクロ経済学、開発経済学の進化を促した。」とある。医学生理学賞の大村智氏、文学賞のスペトラーナ・アレクシエービッチ氏（ベラルーシ）、平和賞のチュニジア国民対話カルテットと並び、弱者や社会問題に目を向けた 2015 年のノーベル賞の特色を表す受賞として話題となった。

ディートン教授がノーベル賞受賞前に注目を集めたのは、2013 年出版の *The Great Escape: Health, Wealth, and the Origins of Inequality*, Princeton Univ. Press, 2013（邦訳『大脱出—健康、お金、格差の起源』みすず書房、2014 年）。本著では、産業革命以来の経済成長、健康、格差の関係を解き明かす内容となっており、最近の貧困の拡大や過度の所得格差に対し警鐘を鳴らしている。ところが、それ以上に話題となった部分は、単刀直入、単純明快な途上国援助批判であった。一言でいうと、ガバナンスの弱い腐敗した途上国の政府を通して援助を行うから、腐敗政権は延命し、いつまでたっても途上国の貧困問題は解消しないのだ、と。出版と同時に、欧米のメディアでは大きく取り扱われたが、自分が知る限り、ディートン教授に対して有効に反論できる者はこれまで現れていない。本年 9 月 25 日、国連総会で 2030 年までの世界の持続可能な発展を目指す新たな開発目標「SDGs」が全会一致で採択された。2030 年までに世界から貧困を撲滅することを主要目的とする SDGs は巨額の資金援助を必要とする。これに対して敢えてスウェーデン王立科学アカデミーは厳しい援助批判を展開するアンガス・ディートンを当ててきたのだ、と解釈する向きもある。

ところで、日本では、ディートン教授の援助批判の部分はマスコミでは全くトピックになっておらず、また、開発援助のプロからの発信も皆無だ。2014 年初頭、関係国際機関が SDGs の宣伝のためのセミナーを東京で開催した際、国際機関の講師に、なぜディートンの援助批判に反駁しないのか正したところ、「あの大御所のディートンに面と向かって反論できるわけがないだろう」との反応だった。同じ質問を日本の援助関係者

に向けてみたが、返事すらなかった。ディートン教授の援助批判を避けず、まともな反論、議論ができるかが、2030年を目標達成年とするSDGsの成否を決するといっても大げさではないだろう。

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべてお客様御自身でご判断下さいますよう、宜しくお願い申し上げます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、その正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されています。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。